

「海辺のカフカ」の舞台をめぐる本

ここ数年、毎年のようにノーベル文学賞候補になるものの惜しくも受賞には至らない村上春樹ですが、今年10月アンデルセン文学賞を受賞しました。児童文学に授与される国際アンデルセン賞と名前がよく似たこのアンデルセン文学賞は、デンマークの文学賞で、アンデルセンが世界の文学界に及ぼした影響を認識させることを目的とし、アンデルセンの生誕地オーデンセの選考委員によって選ばれます。2010年に創設された新しい文学賞ですが、過去にはハリー・ポッターシリーズのJ.K.ローリングなども受賞しています。今日はその村上春樹の作品「海辺のカフカ」の舞台をめぐる本をご紹介します。

「海辺のカフカ」は、東京に住む少年・田村カフカと、猫と会話できる謎めいた老人・ナカタさんの異なる世界に存在する二人の主人公によって、ふたつの視点で平行して描かれた物語です。カフカ少年は15歳の誕生日に父親にかけられた呪いから逃れるために家出を決意し、深夜バスに乗り高松に降り立ちます。一方ナカタ老人は通称「猫殺し」の男を殺害し、東京を離れ、トラック運転手の星野青年の力を借りて旅に出ます。謎のキーワードが二人を導き、読み進めるうちに謎の全貌が明らかになる推理小説風の手法で、カフカ少年の心の成長が描かれています。

1冊目は竹内真/著「図書館の水脈」です。

主人公の売れない作家・甲町は「海辺のカフカ」に導かれて高松に向かいます。一方、読書家のナズナと彼女に惹かれる大学生のワタルのカップルは、ホームページに寄せられたファンのコメントで「海辺のカフカ」を読んで実際に四国に行く人がいることを知り、物語の舞台をめぐりたいという想いを共有し旅立ちます。そして高松のうどん屋で出会った3人は行動を共にします。全編通して作者の村上春樹への愛とリスペクトが満載ですが、「海辺のカフカ」を読んだことがなくても、うどんが好きな人や本が好きな人なら楽しめる物語になっています。

2冊目はナカムラクニオ・道前宏子/著「さんぽで感じる村上春樹」です。

この本は、村上作品の舞台を散歩で感じる案内書です。少年時代を過ごした神戸、学生時代を過ごした早稲田、そしてカフカ少年の足跡をたどる旅の章では、高松と坂出がとりあげられています。写真付きで紹介されている鎌田共済会郷土資料館は「海辺のカフカ」に登場する甲村記念図書館と設立の経緯や設定などが似通っていて、この建物から想像をふくらませて書いたのではないかと、という記述もあります。村上春樹自身は甲村記念図書館は実在しない、と明言していますが、身近な場所がインスピレーションの源になったのかも、と考えると作品をより身近に感じられますね。

3冊目は村上春樹/著「辺境・近境」です。

旅を綴った紀行文のなかに、のんびりと四国を見物しながら讃岐うどんを心ゆくまで味わった旅の記録が載っています。「海辺のカフカ」の中で、早朝に高松に到着したカフカ少年がうどんを食べてそのあまりのおいしさに幸せな気分になった、という描写がありますが、カフカ少年の旅の行方を高松に決めたきっかけは香川で食べたうどんだったのかもしれませんが。「讃岐・超ディープうどん紀行」では坂出のうどん屋さんも訪れています。

みなさんも本を片手に物語の舞台をめぐってみてはいかがでしょうか。